

遥か異国の地から期待を込めて

—男性の解放と社会の変革を先導するために—

A Letter from a Faraway Land with Expectation: Liberation of Man and Innovation of Society

増田 優 Masaru MASUDA

人を資源と敬する国から原油を資源と崇める国へお便りいたします。

1973年秋第4次中東戦争が勃発しました。英明なるファイサル国王が石油戦略を発動した結果、この戦いはそれまでとまったく異なる展開になりました。しかし、統治者として行政長として部族長として1日三度働き人々に敬愛された国王は王族に暗殺されて命を落としてしまいます。その原因は1960年代に国王が義務教育を導入したことに端を発しています。多くの反対を押し切って女性にも教育の機会を与えたのです。教育と女性のありようは社会の根幹にかかわる大事です。国王は行政長としてでも部族長としてでもなく、統治者として人々の将来を思い、命を懸けて宣戦布告にも比する統治行為を断行したのです。

爾来、国をあげて教育に力を入れてきました。山手線内の面積の2倍に匹敵する工業地帯を国の東西に二つ開発した企画大臣はこれを教育施設と称していました。大学院に通う妻を送迎するため、国王主催の閣議を閣僚がしばしば中座すると噂も後を絶ちません。今や大学卒業生の6割を女性が占め、いかなる職業にも就くことも可能になり、人口が20年間で3倍に急増する一方で、女性の自立が進み離婚率は4割に達しています。人こそが資源、人のもつ知恵こそが力、男女を問わず自立した個人として広い世界で自律的に生きていける人材を育てることこそが社会の根幹と考えてやってきた成果です。

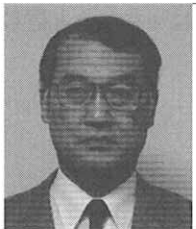
貴国において近年、男女共同参画やライフ・ワーク・バランスの論議が盛んだとおうかがいしますが、その目指すところが今一つよくわかりません。各界の指導者の方々の言葉を拝聴する限り、経済力を落とさないために少子化を避け不足する労働力を補いたいとの思いだけが伝わってき

ます。社会変革への志は遠い異国までは届かないだけかもしれないかもしれません。

沈み行く船から東京にファックスで指示を仰いだとか、女性と2人取り残された孤島から本社に電話でおうかがいを立てたとかいう戯れ言が、経済大国として世界を闊歩した頃しばしば語られました。それから30年を経た今春、学会の討論集会で緊急提言を出すことになり肩書き抜きで個人としての賛否を確認する段になったとき、大企業を定年退職して10年を過ぎた御仁が本社に確認してみると態度を留保したそうです。退職後10年を経ても自ら判断することなく会社の意向に従う姿は麗しい限りです。人生のすべてを託するに足る会社や役所が多数存在する社会は羨ましい限りです。木っ端役人が一言いった途端にすべての学会がそろって男女共同参画委員会をつくったとの噂にも驚嘆いたしました。そもそも学会は個人の資格で参加し個人の見識で論じる場ではないのでしょうか。男女共同参画とはこうした男性社会に女性も足を踏み入れ溶け込んでいくことなのでしょう。

「社畜」や「省畜」という言葉があると聞きました。労働力として畜生のごとく扱われるのはご免ですが、同時に「社畜」や「省畜」と生活をともにするのも女性にとって虚しいものです。男女共同参画やライフ・ワーク・バランスの動きが、家畜の新たな供給源をつくるだけでは淋しい限りです。それでは男性も救われません。貴国は女性にとってあまりにも住み心地が良い社会なのかもしれません。一方、貴国が女性に機会を与えないお陰で優秀な女性がたくさん国際機関に来てくれて大助かりだという話もよく聞きました。もしそうでないならば、広い世界に飛び出すもよし会社や学会を自らつくるもよしはたまた結婚を回避し離婚を求めるもよし、世界で高い評判を得ている貴国の女性の戦い方はいろいろと可能です。

こうした戦いが、つながれた電話線を断ち切って男性を解放し、自立した自分を創造する引き金となり、社会の変革を先導することを、遠い異国の地より祈念いたしております。



お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科自然・応用化学系（112-8610 東京都文京区大塚2-1-1）・教授、ライフワールド・ウォッチセンター長、博士(学術)。1973年京都大学理学部。専門は社会技術革新学、化学物質総合経営学。元日本・サウディアラビア合同委員会代表代理。
E-mail: masuda.masaru@ocha.ac.jp